

# 今後の問題

## 地質学的

には本邦の天然ガスの賦存状況の調査はまだ不十分であつて、どの地域にどのような成分のガスが、どんな風に、どれ程埋藏されているかを適確につかむ仕事が残つている。

特に共水性以外の型のガス鉱床については、大規模な埋藏量を持つ経済価値の大きいものの存在が考えられるので、さし当り注目すべき開発地域として北海道の天塩北見地区・石狩炭田、新潟県の南または西部、北九州炭田などがあげられる。

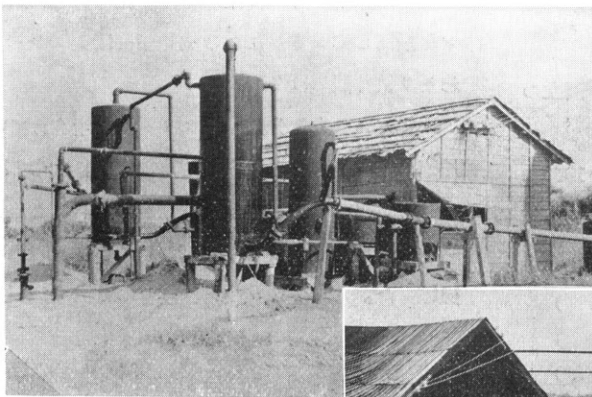
日本の天然ガスは、最初は内燃機関用ガソリンの代用品として開発が進められ、順次工業燃料から化学工業原料へと用途が向かいつつあるが、将来は発電やカーボンブラック用等にも重要視されるであろう。

現在までに公表された資料から推定される埋藏量は、まず1兆～10兆 $m^3$ であるから、仮にガス1 $m^3$ が石油1 $l$ に匹敵する価値をもつとすれば、わが国のガス埋藏量は実に10億～100億 $t$ の原油に相当することとなる。

現在の国産原油量が年間約35万 $t$ であることと、天然ガスの年間生産量が約10億 $m^3$ とを比べて、イタリーに似た国情の日本においては、ガスの価値について改めて認識し直す必要がある。

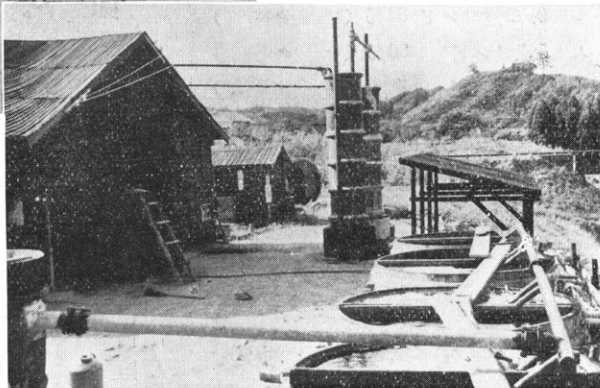
調査や開発・探鉱技術を早急に進歩させて、経済的に充分価値ある大ガス田を発見する努力をする一方、利用面の研究もこれら資源のあり方と関連をもたせながら、進めてゆかなければならない。

計画性のある、しかも技術的に矛盾のない一連の天然ガス及び石油資源の調査・探鉱・開発・利用面の研究とその実施は、現在の日本の国情からすれば当然必要なことであつて、予期される経済効果も相当大きいことは疑いないと思われる。



“ヨード製造工場”

各坑井から集めたガス附随水を処理するタンク。



“茂原ガス田のガス坑井”

千葉県長生郡関村～茂原市～八幡村～宮明にかけての天然ガスとその附随水からヨードを採取。

(大分県天然ガスクーポ提供)